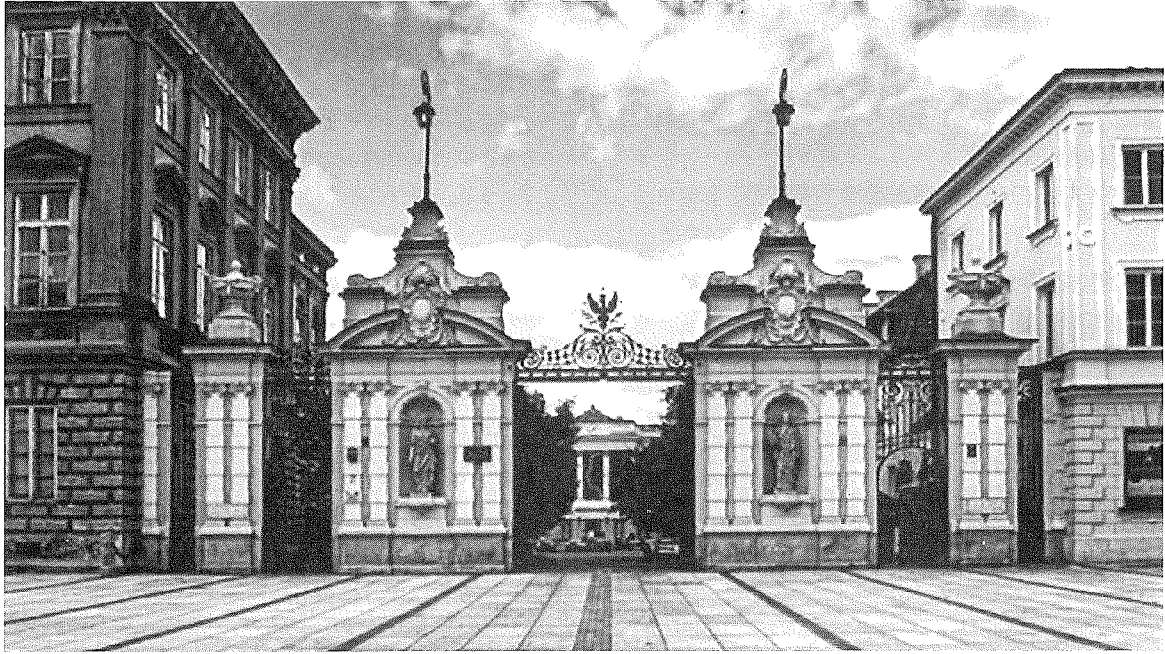


日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報 第15号

発行日 平成27年3月20日
事務局 日ポ・サロン
〒595-0041 泉大津市戎町6-10
TEL.0725-32-6328
FAX.0725-31-3747
E-mail: donkawai@pearl.ocn.ne.jp



ワルシャワ大学正門

「日ポ・サロン発足15周年の節目を迎え感謝を込めて」

NPO法人 日ポ・サロン 理事長

高島 和子

2期10年の在大阪ポーランド共和国名誉総領事を退任し、この度2度目の理事長をさせて頂く事となり身が引き締まる想いでございます。

思い起こせば今年は、'99年に志を同じくする友人達と日ポ・サロンを創設してから15周年の節目の年になりました。ザ・シティクラブ備後町での発会式では初代在大阪ポーランド共和国名誉総領事・高島浩一から祝辞を、ワルシャワ大学日本学科・岡崎恒夫上席講師からメールでご祝辞を賜り、会員数71名で発足致しました。

会員同士の親睦を深めつつ、ワルシャワ大学日本学科から留学生を1名招聘し、1年間の生活費を支援して日本とポーランドの国際親善の一助にしたいとの趣旨に賛同下さっている会員数は、その志が友から友へと伝わり、3月現在131名になっており、おかげさまでこれまでに13名の留学生を招聘する事が出来ました。

ご遠方から長きに亘るご支援やご家庭にお招き下さる方々、旅行や行楽にご招待下さる方々など、数々の温かい支えがある事に感謝致しております。

昨秋開催されたワルシャワ大学学会では、前日本学科長がスライドを使って日ポ・サロンを紹介され長年の感謝を述べられ、留学生はとても優しい人柄になって帰国すると仰って下さいました。それは四季を愛でながら全てに神宿る精神で丁寧に暮らす事を是とする日本人に優しく受け入れられ学んだからだと思います。

また日ポ・サロンの行事や日本文化体験に招待した留学生は延べ人数で71名にものぼり、博士号取得はもとより日本学科の準教授や講師、東洋学部講師に、OECDバリのポーランド政府代表に、企業通訳や裁判通訳に、会社設立に、研究著作出版で受賞される方々や、日本人とご結婚されて日本在住など、其々が進む道を見つけ着実に才能を発揮されて頼もしく歩んでおられます。これもひとえに皆様方の温かいご協力とご支援の賜物でございます。

情けは人の為ならずと申します。私達の世代が次の世代に手を差し伸べられる事の幸せを思い、今後とも変わらぬ温かいご支援とお力添えを切にお願い致します。ご挨拶とさせていただきます。

総会並びに講演会

2014年1月25日(土)

於/KBS「桐の間」

会員46名・留学生8名・お客様2名

<第一部>総会(会員45名出席・委任状36名提出)

2013年度事業報告

2013年度会計報告並びに監査報告

2014年度事業報告

役員紹介

表彰 金一封授与

*佐々木ボグナ・ヤンコフスカ(京都大学博士号)

宮沢賢治奨励賞

*ヤマシュ・ミトコ(京都大学博士号取得)

<第二部>講演会

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」
理想の現実主義者

「官兵衛は何を望んだか・・・」

講師 柳谷郁子氏

早稲田大学卒・姫路在住
文芸同人誌「播火」編集長
第14回大阪女性文芸賞
ほか著書多数



<寄稿>

敗者の栄光

柳 谷 郁 子

NHKの大河ドラマ『軍師・官兵衛』放映に当たって企画された、JR西日本・ジパングの広報誌『旅のアトリエ』の官兵衛ゆかりの地をめぐる紀行文を、「官兵衛がゆく」として14回にわたり連載、その取材にあたって得た感動は今も生々しく、そして今後も私の胸に生き続けることになるだろう。

いわゆる「ゆかりの地」の大方は、敗者が輝く地であった。考えてみれば当然のことであったが、そのことに改めては思いが及んでいなかった。

どういう理由にせよ多くは敗けるを覚悟で敢然と立ち自身の立場と誇りを懸けて命を代償に戦い散っていった、涙なしでは語られない戦国の世の勇者たちの物語が、あっちでもこっちでも私を待ち受けていた。当地では敗者こそがスターであった。神として祀られてさえいた。

勝者を讃えつつそれ以上に「敗者の美学」を尊ぶのは、日本人の特性なのかも知れない。彼らは、何百年という時空を超えて、勝者と同じく或いは勝者以上に歴史の運命と栄光を背負い、その地郷土の魂の拠りどころとなっているのであった。そして今また、未来へ、ふるさと起こしに貢献している。

歴史は実に勝者と敗者を平等に照らす。歴史の醍醐味である。

〈怨〉の解消には百年単位の時を要するものらしい。吉良町と赤穂の握手は四百年を経て。會津と長州は百五十年を経てつい最近のこと。官兵衛を幽閉した荒木村重の伊丹と官兵衛出身の地姫路の市長同士が今後の友好を約したのは、この度の『大河ドラマ』を機縁としてであった。恩讐の彼方のお遊びの仕儀と微笑ましくも面白がりながら、ひそかに會津に至っては多分に本気もあるようだから、人間の感情とは生易しいものではないのだ。

さて、どの地にも我こそはの郷土愛に突き動かされて活動する人々の圧倒的な情熱があった。郷土の歴史、人的遺産、専門の研究者をもしのご知識博識をもって語ってやまない人達がいた。どうか若者たち子供たちに伝えていってほしい、そのかぎり日本の未来には確かな背骨が一本通っていくだろうと、願うことしきりである。

2015 (H27) 1.8

「平成26年度の総会並びに 講演会・親睦会に出席して」

藤 木 桂 子

1月25日のKBS桐の間は出席者たちの熱気でむせ返るようであった。総出席者数が5.2名あり、例年の丸テーブル形式では座り切れないほどの大盛況、限られたスペースでのテーブルセッティングにはご苦労があったことと拝察した。

第一部、総会は滞りなく進行し、佐々木ボグナさんとヤマシュ・ミトコさんの表彰式があり、全員が大きな拍手で功績を祝福した。

第二部の柳谷郁子氏による講演、「官兵衛は何を望んだか・・・」は、聴衆の強い興味と熱意が一体となって会場に満ち溢れ、柳谷氏の物静かだが熱い語り口は聴く者を惹きつけて止まず、息をするのさえ忘れるほどであった。柳谷氏は著書も多く数々の賞を受賞されているが、今回は作家の目から見た大河ドラマ「軍師・官兵衛」の誰も知らない史実の裏話や秘話中の秘話を披露してもらったので、この先のドラマの展開を今日の貴重な秘話と重ね合わせながら観ると120%は楽しめる！とひとり悦に入った。作家は作品を仕上げるまでに徹底的な研究とリサーチ、膨大な資料の裏付けや確認に計り知れない程の時間と労力を費やし、推敲に推敲を重ねて一つの作品を完成させることを思うと、作品では目の見なかった裏話や秘話をもっと聴きたい衝動に駆られた。次の講演が待ち遠しい。

官兵衛さんのように「よろしく」と生まれ、「もうよい」と言って逝きたいものだ。講演の興奮さめやらぬまま隣席の留学生マルチン君と和気藹藹とお喋りに興じながら松花堂弁当に舌鼓を打ち、新留学生のグラジクさんの流暢な日本語での挨拶に感心して聴き入り、留学生さん達の近況報告に大いに刺激を受けて和やかな雰囲気の中に閉会を迎えた。

今年も数々の魅力的な事業計画があると聞いた。今から楽しみにしている。

「春の遠足・信貴山へお花見」

2014年4月7日(月)

会員22名 留学生5名

春の遠足 ～信貴山を楽しむ！～

杉谷和代

前日までの花冷えは嘘のように晴天の遠足日和に恵まれ日ポ・サロンは晴れ女が多いのでしょうか！ また、日頃の行いも良いのでしょうか！ この恵みを感じながらの春の遠足は5名の留学生と22名の会員、総勢27名の大遠足となった。

皆さんは奈良側の王子駅からバスで高安山に、私は大阪の信貴山麓から7分ほどのケーブルカーに乗り、その後、朝護孫子寺で皆様と落ち合うことになった。開運橋を渡りながら前方に広がる朝護孫子寺本堂と一面の桜の花、眼下に奈良盆地の眺望、赤門前には世界一の張り子のトラにカメラのシャッターを切り心は既に遠足気分为本堂に向かった。

信貴山の麓で生まれ育った私は今も台所からも高安山に昇る朝日を眺め、河内平野の彼方に沈む日没を眺め、信貴山は生活の一部である。それでも高安山までケーブルカーで上るのは何年ぶりかのことで懐かしく、ケーブルカーから眺める河内平野の景色もずいぶん高層ビルが立ち並び変貌したようだ。日本一の高層ビル・ハルカスも聳え立って見えた。ケーブルカーが高安山に到着し、バスで5分、朝護孫子寺手前に到着、皆さんと合流した。

信貴山朝護孫子寺の歴史は、昔々、この山で聖徳太子が「寅の年、寅の日、寅の刻」に毘沙門天王の力を借りて世の中の平和を取り戻された。そのことで聖徳太子がこの山を「信ずべき、尊ぶべき山」として信貴山と名付け、毘沙門天を祀るための寺院を創建されたのが今から1400余年前。その後命蓮上人が醍醐天皇の病氣平癒を祈願され、たちまち全快なされたことから大変お喜びになり「朝護孫子寺」の寺号を賜った。現在では「信貴山の毘沙門さん」「信貴山寺」などと呼ばれ、「商売繁盛」「必勝祈願」「金運招福」「合格祈願」など庶民信仰の場として広く親しまれている。また巨大な虎の張り子「世界一の福虎」や「マンガ」のルーツと言われる「国宝信貴山縁起絵巻」の展示など、信仰、世代に拘わらず観光地としても安らぎの場としても訪れたくなる不思議な空間である。「虎」の縁で阪神タイガースの選手たちが優勝を祈願して登ったことも報道されたが、それもアクセスは奈良方面からで大阪からのアクセスも結構情緒あるものなので、一度お試しになるのもよいでしょう。

河合理事長をはじめ下見に来て下さった役員の方々のアレンジで真言宗の祈祷を受け、日ポ・サロンの今後の発展と私たちの健康と安全も祈願して下さい、とてもよい体験だった。ご祈祷前には珍しい戒壇巡りを体験した。約60m(約5分)暗闇の中、右手を壁に当てながら廻ると灯明の場所がある。そこには十二支生まれの八体の仏像がお祀りしてあり家内安全や身体健全を祈る。さらに暗闇を前進すると鉄の錠前があるのでそれに触れると一願成就のご利益が授かるとい



われている。真っ暗の中を歩くことはこれほど難しいことを実感しよい修行をさせていただいた。信貴山には信貴山城跡も残っている。現在、NHK大河ドラマ戦国時代の「黒田官兵衛」にも出てくる織田信長に謀反を起こし落城した松永久秀の城跡として有名である。

朝護孫子寺本堂の欄干に立てば、眼下に大和平野と河内平野が一望でき、戦国時代の歴史の舞台となった往時が偲ばれる思いだった。

いよいよ遠足のメインイベント昼食会場の十三屋に向かう。途中門前のお店で思い思いにお土産を買って求めたりしながら十三屋に着いた頃はお腹も空いたお昼時。しだれ桜もまだつぼみの見事な美しい庭園に面した大広間に案内され、ゆったりとテーブルについた。河合理事長のごあいさつで昼食開始となった。丁度各テーブルに留学生が座り、テーブルごとに彼らを囲んで大いに会話が弾んでいたようだ。1対4ぐらいなので留学生はいろいろ質問攻めにあって、私もご多分にもれずあれこれ質問し、彼らのお箸を止めてしまったようで反省したが、何を聞いても真摯に流暢な日本語で答えが返ってくるので、本当に立派な留学生だと改めて感心し彼らの将来が楽しみだと思った。日本の大学生はアルバイトに忙しくてあまり勉強をしないということはある教授から伺ったが、ポーランドの留学生は学生の本分をわきまえているように感じる。今、この時に学生としてすべきことを優先し、目的達成に努力している姿は何か新鮮なものを感じ元気をもらったような気がした。将来、日本での経験を生かし日本とポーランドの交流をつなげて行ってくれることは日ポ・サロンの活動にも大きな励みとなる。

日ポ・サロン会報第14号の理事長の言葉に「有由 有縁」の通り留学生との出会い、会員同士の出会いを大切に感じ、自分たちが先ず楽しみ、そのことが日ポの活動に繋がることを将来きっと実を結び花が咲くと思う。

十三屋の美しい美味しいお料理に加え、心こもるおもてなしのおかげで、また下見など準備して下さい役員のおかげで楽しい春のひと時を過ごすことができ、このすべてに感謝し、来年もまた春の遠足に元気に集えることを祈願しそれぞれの帰路についた。私はまたケーブルカーで下山し、愛犬マ一子と散歩した道を歩くことができたのも春の遠足のおかげ。本当にありがたい一日だった。





信貴山の思い出

ハンナ・カマシェフスカ
(大阪教育大学)

初めまして、ハンナ・カマシェフスカと申します。
ワルシャワ大学の出身で、一年間大阪教育大学に留学していました。春爛漫の4月7日に、日ポ・サロンの皆様とご一緒に信貴山への遠足に参加させて頂きました。

バスを降りたところ、満開の桜に囲まれた道を歩きながら、朝護孫子寺に向かいました。お寺の赤門に着く少し前に、大型の寅の像があり、それは記念写真ポイントとなっているそうです。一体なぜ寅の像があるのか、個人的に興味を持って、おそらく醍醐天皇が病氣になったため、毘沙門天王に病氣平癒の祈願をし、しばらくしたら天皇の病状が治りました。したがって、願いが叶えたので、福に恵まれる場所だとされ、「世界一福寅」ができたというわけです。

もっと階段を上りつつ、玉蔵院に着くと、悟りを探す人のために造られたトンネル（戒壇めぐり）は、とても面白かったです。暗闇の中を歩き、まったく何も見えなかった私は、天井がどんどん低くなってしまいう気がしました。一人だったらきつと怖いですが、皆様と一緒にいたのでとても楽しい経験になりました。また、本堂での大般若祈祷の後、堂内の色々な像を参拝致しました。その後、お堂の見晴らしのよいところで全員そろって記念写真に納まり、お昼ご飯をいただく場所とされた十三屋に向かいました。

まず、食事の準備ができるのを待っているうちに、抹茶・桜の花に型どられた和菓子を頂きました。相変わらず日本人らしく、自然と季節が調和しながらとても気持ち良かったです。食事のほうもきわめて豪華で、外見的に綺麗過ぎ食べてしまったらもったいないというような感じでした。言うまでもなく、何もかもとても美味しかったし、皆様とお話ししながらもっとも楽しく時間を過ごすことができました。

日ポ・サロンの皆様と一緒に遠足への参加を許して頂いて、素敵な時間を過ごせて、誠にありがとうございました。皆様に感謝の気持ちを述べたいと思います。来月帰国しますが、またいつか皆様にお会いできる日を楽しみにしています。

ゴシャさん送別会

2014年8月11日(月)
於/KBS
会員27名・留学生3名

私の留学記(留学を終えて)

グラジク・マゴウジャタ
(神戸大学国際文化学部)

1. 自己紹介

マゴウジャタ・グラジクと申します。去年の10月1日から日ポ・サロンのサポートのおかげで日本に留学しました。3年間トルンの日本学科と2年間ワルシャワ大学の日本学科で日本文化と日本語を勉強しました。主に日本伝統文化に興味があり、私の研究テーマは、お茶で使われている裂地という古い切れです。この発表では、ほぼ1年間どういうふうにご過ごしたことを話したいと思います。皆様のおかげで大事な経験と知識を得ました。心より感謝いたします。

2. 研究のため活動

〈お稽古〉ポーランドでは3年間ぐらいお茶を稽古しましたので、日本でも練習できてとても嬉しかったです。ポーランドで習った薄茶の点前だけでなく、濃茶もはじめてしました。

〈仕覆ワークショップ〉を見学しました。仕覆の裂地も手に取って、よく見る事ができました。その上で、仕覆の作り方をもっと深く理解できました。

〈美術館・博物館・図書館〉様々な図書館、美術館と博物館に行きました。大阪府立図書館や奈良国立博物館などに布に関する資料も集まりました。ポーランドで手に入らない本も沢山集まりました。

〈龍村ショールーム〉東京に行ったとき、龍村ショールームに写真を撮ったり、切れを見たり、研究も進みました。写真でしか見ると実際に見るのは全然違うとあのときよくわかりました。ショールームの図書館も自由に利用できたので、資料も集まりました。

3. 日本文化について知識を広げるため活動

〈国立文楽劇場〉に何回も行って、文楽を観ることができました。同じ場所で、琴の素晴らしいコンサートも聴きました。それだけでなく、雅楽と舞楽も楽しめました。大阪と近いに住んでいることは本当に良かったと思いました。めったにないことを沢山体験しました。

〈琉球舞踊〉京都の南座で琉球舞踊を観ました。沖縄の人と一緒に阪東玉三郎が演出しました。日本の一番有名な女形を実際に見るのは本当にラッキーだと思いました。沖縄の衣装と踊りや音楽を関西で楽しめることができました。

〈日ポ関西勉強会〉で半年、ネイティブスピーカーとしてポーランド語勉強会で手伝いました。ポーランド語について話したり、ポーランド文化を紹介したりしました。

〈人形・ドール〉ももとは、現代球体関節人形に興味を持ち、日本では文楽の人形、木目込み人形、日本人形に興味を持つようになりました。

4. 旅行

〈東京〉クリスマスは東京に過ごしました。お台場で東京とレインボーブリッジを眺めました。秋葉原と渋谷で若者文化を体験しました。。その上、クリスマスのライトアップをえびすガーデンプレイスや銀座と新宿で楽しめました。浅草の近い東京スカイツリーものぼりました。新幹線に乗ったとき富士山も見えました。

〈京都〉では、日本料理、お寺や神社、日本建築、芸能と芸術、つまり日本伝統文化を懂れました。

〈奈良〉京都と同じく、主にお寺や神社に行ったり、博物館で展示会を見たりしました。

〈大阪〉大阪は近くて便利でした。大阪城や陶器の展示に何回も行きました。

〈神戸〉神戸のおしゃれな雰囲気はとても気に入りました。神戸は安心できれいなところと思いました。毎日山と海の景色を眺めて、神戸に住むのは幸せと思いました。

〈名古屋〉の伝統的とモダンなアспект、両方は大好きでした。名古屋城とそこにある展示では日本刀や鎧を初めて見ました。

5. 大学で勉強したこと

《日本文化表象論》では、日本映画の歴史と技法を学びました。古い映画の魅力を発見し、次の授業はいつも楽しみにしました。ポーランドで有名な黒澤明や小津安二郎の映画について知識を広げました。しかし、それだけでなく、前知らなかった監督についても勉強できました。

《日本芸能文化論特殊講義》明治時代以降の日本音楽文化について勉強しました。日本ではどうやって西洋音楽は取り入れたことも、日本音楽のことも、講義と専門文章によって学んだことが山ほどあります。

《芸術文化論特殊講義》世界芸術の教科書を読みながら、様々な視点からアートを勉強しました。レポートを書いたり、教科書の内容をまとめたり、日本語力も磨きました。

《スラブ文化》という科目においてヨーロッパの現在問題について勉強しました。特にウクライナ情勢に集中しました。日本人やアジア人の視点から見ると、新たにヨーロッパの状況を拝見できました。

《現代アート》今までは、現代アートより伝統芸術に興味がありましたが、アートについての知識を広げるためにはこの授業に参加しました。二十世紀と二十一世紀の世界アートについて講義を聴き、専門文書を読み、アートに関する自分の意見や感想を表現することを練習しました。

《ビジネス日本語》には日本語を勉強しながら日本の会社や就職システムに関することを学びました。実際にどうやってビジネスメールを書くとか、面接の練習とか、電話での会話とか、日常生活に役に立つものを沢山身に付けました。

《アートマネジメント》において主に日本とドイツのアートマネジメントに関して勉強しました。その上、神戸ビエンナーレなど、様々な展覧会に参加しました。

《ボランティア ポーランド語》ボランティアとして神戸大学の日本人の学生にポーランド語を教えました。今年は、神戸大学から5人ぐらいがポーランドに留学することにしました。二人はもう今月ワルシャワ大学に入学しました。帰国したら、日本人の留学生と交流を続けたいです。

研究テーマ・裂地

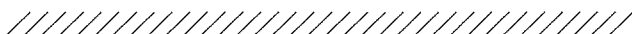
茶道に使われている染織品は裂地と言います。私の論文においてその布の文様、色、由来などについて説明したいと思っています。裂地は茶道において広く使用されています。たとえば、掛物の表具、茶入の仕覆、帛紗、小物類などとして使用されています。裂地は茶会のときではよく見逃すことがあるかもしれませんが、実は奥が深いです。織り方が様々なだけでなく、布の種類も多いです。布の文様と名称には様々な物語や情報が隠れています。芸術を鑑賞するように、ただ見た目を見て楽しめますが、コンテクストを理解すれば、茶道具の取り合わせをより深く理解し、茶事やお茶会を別の視点から体験できます。切地の役割は道具を守ると道具の美しさを引き立てることです。

文様のタイプもいくつかあります。パターンによって分けると植物文様、動物文様、吉祥文様、自然文様、天象文様、幾何学文様などあります。裂のタイプも沢山あります。もっとも代表的なのは、金襴、緞子、間道、錦、風、紹杞、モール、金紗、印金、海気、ピロードと言われます。布の由緒についても、研究します。例えば、道元緞子は道元禅師が床から持ってきた袈裟裂から由来します。そういう研究はポーランド語で今までなかったもので、ポーランドでお茶を稽古している皆さんにとって役に立つと思っています。

留学中勉強したことを活用し、日本とポーランドの間の架け橋になりたいと思っています。日ポ・サロンの皆様のおかげで、日本語と日本文化を学び、修士論文の資料を集めました。本当に感謝いたします。皆様、ありがとうございます。



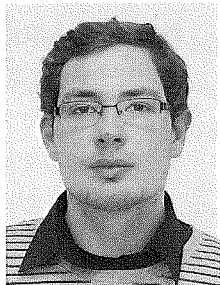
中央・ゴシャさん



「自己紹介と感想」

ハリウオ・ヤクブ
(神戸大学国際文化部)

初めまして。ハリウオ・ヤクブと申します。
ワルシャワ大学の日本学科の修士2年生で、今、神戸大学の国際文化学研究科で留学しております。私は、去年の10月に初めて日本にきましたが、日本に来ることは、中学生の頃から私の夢でした。



その頃、私は、ジェームス・クラベルの「将軍」という小説に基づいたドラマを見てから、戦国時代のヨーロッパと日本の間の関係に興味になりました。日本学科に入学してからそのテーマをもっと研究しておりました。今、小説・映画・漫画・アニメなど、日本文化におけるキリシタンの迫害のイメージについて、修士論文を書いております。

私が来日した後でカルチャーショックを体験したか、という質問をよくお聞きします。実は、私は5年間、日本文化について勉強しておりましたから、そんな体験をあまりしませんでした。でも、私を驚かせたことは、もちろん、多かったです。

例えば、私は神戸大学住吉国際学生宿舎という寮に住んでおります。住吉寮の部屋には個人的なシャワーではなくて、共通の浴室しかありません。住吉寮は国際寮ですから、浴室に洋式シャワーがあると思いましたが、ですから、初の夜に、私は浴室のドアを開けて、裸全体の人を見た、とてもびっくりしました。しかし、そのことだけでなく、他の日本の習慣にも、もう慣れたと思います。

日本での私の大好きなことは自然です。毎日、寮から神戸大学キャンパスまで歩いていくとき、山も海も見えて、それはとても美しい景色だと思います。けれども、自然は危ない面もあります。例えば、イノシシはよく山を下りて、住吉寮の境内で食物を探すから、夜に寮に出入りするとき、気を付けなければなりません。

神戸大学キャンパスをワルシャワ大学キャンパスに比べて、神戸大学の方が大きくて広いです。ワルシャワ大学キャンパスは狭くて、小さいから、スポーツの施設が全然ありません。だから、神戸大学キャンパスで初めて馬屋を見たと、本当に驚きました。そして、神戸大学の留学生センターの前で、美しい神戸の景色が見えます。

私は、神戸大学で、日本人も留学生も友達がたくさんできました。国際文化学部で、私以外、もう二人のポーランド人が留学しています。

今学期は、とても面白くて楽しかったです。日ポ・サロンの方々の支援のおかげで、私の夢が実現して、心の底から感謝いたします。よろしくお願い致します。

田中正也ピアノリサイタル

2014年11月8日(土)14:00開演

あいおいニッセイ同和損保

ザ・フェニックスホール

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 TEL.06-6363-7996
(梅田新道・東南角 ニッセイ同和損保フェニックスタワー内)

ポーランド音楽の尽きない魅力
“ショパンからグレツキまで”



- | | |
|----------|--|
| * ショパン | ポロネーズ 第6番「英雄」 Op.53 変イ長調
子守歌 Op.57 変ニ長調
ノクターン 第13番 Op.48 No.1 ハ短調 |
| * バデレフスキ | メヌエット Op.14 No.1 ト長調 |
| * グレツキ | 4つの前奏曲 Op.1
No.1 Molto agitato - Cantabile, meno mosso (andante) - Tempo 1
No.2 Lento - recitativo
No.3 Allegro scherzando
No.4 Molto allegro quasi presto |
| * バツェヴィチ | コンサート・クラコヴィアク |
| ～ 休憩 ～ | |
| * ショパン | ワルツ 第7番 Op.64 No.2 嬰ハ短調
ソナタ 第3番 Op.58 No.3 ロ短調
第1楽章 Allegro maestoso
第2楽章 Scherzo Molto vivace
第3楽章 Largo
第4楽章 Finale Presto, non tanto |

御礼ごあいさつ

田中正也

11月の秋の澄んだ空気の中、ポーランドからの留学生も交えた温かな聴衆のもと演奏させていただきました。

ショパンの作品に加えたポーランド現代音楽は初めて聴かれた方も多かったと思いますが、斬新な響きに反響をいただき嬉しかったです。私自身も現代作品にポーランド音楽の奥深さを体感することができ、充実した時間となりました。
ザ・フェニックスホールいっぱいのお客様の心がひとつになる瞬間を何度も感じ、身震いしたのを今も鮮明に覚えています。今一度このコンサートに関わられたすべての方に深謝申し上げます。

私が最初にポーランドを訪れたのはモスクワ音楽院に在学中で、友人に誘われプロツワフヘコンクールを聴きに行きました。車好きなので小さなレンタカーを借りて、ポーランドの平原を疾走したのは楽しい思い出です。その数年後、ショパンの権威であるスメンジャンカ女史に教を請うことになるのですが、その時のワルシャワでの出会いが「日ポ・サロン」の皆様とのご縁に繋がることは想像できませんでした。

モスクワ音楽院大学院卒業後、日本でも本格的に演奏活動を開始しましたが、コンサートにおいて下さったり、会員様の邸宅でサロンコンサートを開催して下さいと、大いなるご支援をいただき感謝しております。

15歳から長い留学生生活をモスクワで送った私ですが、やはり多くのロシアの方にお世話になりました。ポーランドからの留学生にとっても「日ポ・サロン」は大変心強い存在だろうと思います。

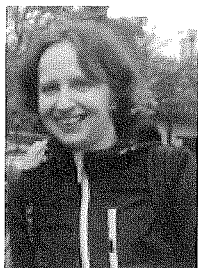
「日ポ・サロン」が15周年を迎えられることにお祝いを申し上げますと共に、これからも日本とポーランドの交流事業が未永く継続されますことを祈念致します。

佐々木ボグナ氏講演会

2014年12月1日(月) 於: 京都白河院
会員19名・お客様7名・留学生5名

「宮沢賢治のという迷宮」

佐々木ボグナ・ヤンコフスカ
(京都大学ポーランド語講座講師)



今回のお話は私の研究内容を少し紹介する傍ら、宮沢賢治の文学とはどのようなものか、と考える内容であった。

「宮沢賢治という迷宮」というタイトルは、その研究に十数年をかけてきた宮沢賢治が、私にとっていまだによく分からない、続々新たな謎が出てくる人物だという意味である。一言でいえば自分の本性を簡単に見せない作家だといえる。その代わりに、退屈させない作家でもある。

賢治自身は、主に詩の中であるが、何回も自己紹介と思えるようなことをいう。有名な「雨ニモマケズ」では、賢治は我慢強く人に仕えるような、自分の理想的な姿を描く。とても素朴で分かりやすく、直接に人の心に訴える内容だといえる。一方、詩集『春と修羅』の「序」という詩の中で、「わたくしといふ現象は(中略)一つの青い照明です」というふうに自分自身を規定する。彼は全世界や全宇宙をイルミネーションのようなもので、自分自身がその中の明滅する一つの電球として考えていると想像してもいいだろう。さらに、同じく詩集『春と修羅』の表題作「春と修羅」の中では、賢治は「おれはひとりの修羅なのだ」と言っている。ここではまた別の、とても怖そうなイメージである。このよく知られる三つの箇所だけでも全く違う賢治像が見えるといえる。

その作品を考えれば考えるほど、さらに混乱する。作品を通して賢治は間接的により沢山の顔だけでなく、様々な世界も見せてくれる。賢治文学というのはとても思いがけないもので、内容もスタイルもヴァリエーションに富んでいる。また、多くの解釈ができる開かれた構造をもつ作品が多い。作品を知れば知るほど、まさに迷宮に入ったような気分になる。

賢治の多面的な世界を作り上げる重要な要素の一つはその柔軟性のある目線だと考えられる。世界を眺める時に複数のパースペクティブを使い、そのおかげで世界の様々な繋がりが見えてくる。空気は水に見えたり、日差しが琥珀に見えたり、チュウリップの不思議は酒のようになる。さらに、科学用語や仏教用語となると、道はさらにくねくねと曲がるものとなる。

さらに、賢治は花巻に拠点をおきながら、日本から世界へ常にその地理的パースペクティブも変化させる。それぞれの

視点の間の移り変わりはとても自然なもので、例えば「注文の多い料理店」の舞台となる山の中にある西洋料理店というような風変わりな設定もあり違和感をもたらさない。「イートハヴ」の形で現れる岩手は、一つの具体的な場所でもあり、全世界でもあり、物理的なものでもあり、精神的な世界でもある。普通であれば、それぞれのレベルが矛盾するが、賢治はそれを一つのものに凝縮することができた。

賢治という迷宮の中を通ってみると、全てのルートが分かりにくいというわけではない。賢治は時にはまっすぐなメッセージも送る。



賢治という迷宮の中を通ってみると、全てのルートが分かりにくいというわけではない。賢治は時にはまっすぐなメッセージも送る。例えば、「農民芸術概論綱要」の「強く正しく生活せよ 苦難を避けず直進せよ」という文章がある。あるいは有名な「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という一言である。このようなまっすぐなメッセージを聞くと、賢治の考え方に共感し、賢治の全てが見えるような気分になる。しかし、賢治という迷宮の面白さは、別のルートを行ってみると、急に停まってしまう。例えば、先ほどの「農民芸術概論綱要」では「...われらに要するものは銀河を包む透明な意思 巨きな力と熱である...」という表現もあるが、難しい。賢治は常に世界を複数の視点で見ているようで、物事を具体的な事柄を通してみても、宇宙単位で物事をみても、彼にとってそれ程差がないのだろう。

このような賢治文学の性質は私の研究領域に差し掛かる部分でもある。私の研究テーマは簡単にいえば賢治童話における現実と非現実のあり方という問題である。それを「相対性」つまり複数のパースペクティブと組合せて考えてきた。

賢治文学を幻想文学としてみることは、賢治研究の中では一つの流れとなっている。「童話」という形式で自分の世界を表現した理由の一つは、彼は現実世界と非現実世界が基本的に同等のものと見るところにあるだろう。戸惑いつつ自分

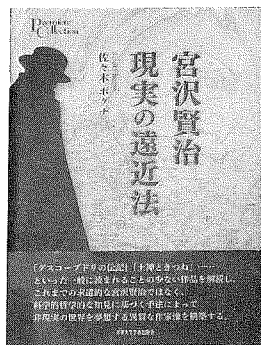
でも常にその両方を体験しながら生きていたようである。幸いに、賢治は優れた観察力と同時に優れた表現力にも恵まれていたので、自分で体験する世界を巧みに書きとめることもできた。

賢治は複数のパースペクティブを使って我々にも世界を新しい角度から見せながら、また非現実世界を通して我々の感覚も感わせ、現実の不確実性を体験させ、どこかで人間の生きることの本質にふれることを可能にする。

このように、簡単に把握できない賢治ワールドだが、これからも色々と探求に出たい。賢治は「求道すでに道である」という言葉も残しているが、そういう感覚で臨んで少しでも賢治のやっていたことへの理解に近づければ幸いである。

佐々木ボグナさんの著作

第23回宮沢賢治賞奨励賞受賞
「宮沢賢治 現実の遠近法」
京都大学学術出版会



昨年の会報(第14号)でもご紹介しました本書は、「グスコーブドリの伝記」「土神とキツネ」といった一般に読まれることの少ない作品を解説し、これまでの求道的な宮沢賢治ではなく、科学的哲学的な知識に基づく手法によって非現実の世界を夢想する異質な作家論を構築し、賢治童話を日本近代文学に稀な「幻想文学」として捉えなおしたものです。

佐々木ボグナ氏の

「宮沢賢治の文学は迷宮」を拝聴して

道下 二三子

先ず、私が、読んだことのある賢治作品からは、思いもつかなかった観点、「遠近法」を用いて分析されてるとの衝撃的な講演に、私はどぎまぎとしました。

今まで、一度だって絵画的な手法があるとは思っても及ばなかったからです。

確かに賢治の童話は「分かった。解ってる。」「そうだ。」と一見同調してしまいがちであるが、その実、確固たる「解った。」も「そうだ。」も揺らいでいることが多い。そして、自分の想像力、創造力の範囲の中でしかないと知られるのは、次に読み返した時、気付かされる。何故なら、賢治は彼自身の「心象スケッチ」として作品を書いていたのだが、大人にも子供にもその真意を伝えるべく、独自の表現、言葉を用いている。しかし、その言葉の持つ底の意味、賢治の思想を理解するには、想像力、創造力に加えて思考力が必要であることに気付いて、幾度でも読み返してみたくなる。自分への挑戦であるかもしれない。

日本語で育っている私ですら、賢治の使っている言葉の意味、思想を理解できると言い切れないもどかしさを感じる。

外国語で賢治を読み、理解するのは如何ほど困難な作業が重ねられたことだろうと、佐々木ボグナ氏の賢治に対する真摯な研究に感動致しました。

私の娘たちは日本語と英語のバイリンガルで育ちました。中・高生の頃、よく私に「ママ、きちんと主語つけて話してよ!」と苛立って申しました。同年齢の他の人にはちゃんと通じていたのに。

感情的に情緒的にものを見る時には、日本語で考えるが、論理的に考える時には、英語でないと考えられないと申し出ていたことを思い出しました。ずっと以前、子供の頃、ドイツで育った知人が「英語よりもドイツ語の方が論理的である。考えるのに都合が良い。」との言葉も思い出しました。

ポーランド語は、どうだかわかりませんが、隣接する国々の多いところでの言語は、正確に相手に自分の意思を伝えることの大切さを第一にしていることでしょう。その中で賢治の現実と理想との一体感を、私たちが解ったと甘んじている「阿」「吽」の呼吸に依存して読んでいる賢治の作品への心構えを改めて、考え直す指針を示して頂けた気が致しております。ありがとうございます。

「賢治のこと」

岡田 紀久

ボグナさんの講演を聴いて、感銘を受けました。賢治の文学を解説分析して、新しい視点で捉えてみせて下さいました。

私も若い頃から賢治の作品が好きでしたので懐かしく思いました。賢治が編んだ「注文の多い料理店」の中の童話群は、どちらかというと明るく楽しげです。私の一番好きなのは「水仙月の四日」ですが、これもラストに希望があり、安堵感で終わります。雪丘を舞台とした世界に、雪婆んご、赤い毛布にくるまれた子ども、雪狼、雪童子が活躍します。何回読んでも、雪の世界の虜になります。「注文の多い料理店」以外の童話の中には、哀しく辛い読後感のものが多数あります。「ひかりの素足」も、子どもの雪の中の遭難を題材にしていますが、本当にせつないものです。賢治にあっては、死や死後の世界は親しいものであったのでしょうか。妹トシの死んだ事、自分自身の死は15年前から予告したということですから、若い頃から死を見つめることができた人かもしれない、と思います。

「銀河鉄道の夜」はそうした余裕で、楽しみながら何回も書き直しているのでしょうか。「よだかの星」「黄いろのトマト」「土神ときつね」も、ユーモラスだけれど、とても哀しい話です。

たくさん賢治の作品を、昔読んだ時は、これら透明でビュアで美しいため、容易に手を触れてはいけなような気がしました。でも本当は、難解で理解しにくかったからかもしれません。土俗的な味もありますが、科学用語満載で歴史、哲学、天文学、化学、美術、音楽にも精通した法華経信者という作者は、不思議な魅力に満ちています。ヒマラヤ級の山々のように、近くで肉眼では正視し難く避けていたような気がします。

修羅である賢治、求道即ち道である、と説く賢治の姿が浮かんできます。

人生の終わりに近づいてきた今、幾編かの賢治の作品を読み返してみて、作者の指し示す世界への共感が深くなる気がします。不条理であるけれど、魅力いっぱいこの世に生きていて、賢治の想いは胸を刺します。

20年ほど前、花巻にある賢治記念館へ行きました。難解な賢治用語を解説し、視覚化してくれるビデオもあり、滞在時間が短かすぎ、とても心残りでした。また行って見たい気持ちが高まっています。

ボグナさんの講演は「現実と非現実のせめぎあい」を語っておられましたが、それを聴いて、境界線のはっきりしない自分の心のあり方を自覚させられました。有難うございました。

日ポ・サロン創立15周年記念に寄せて

「結成15周年を祝して」

岡崎 恒夫

(ワルシャワ大学日本学科上席講師)

日本・ポーランドサロン結成15周年おめでとうございます。この15年間サロンの運営にあられた会長様はじめそれを支えてこられた会員の皆様に心からの祝意を表します。また、サロンの活動の恩恵をずっと受けて来たワルシャワ大学日本学科の学生・教官を代表して心から感謝の意を表します。

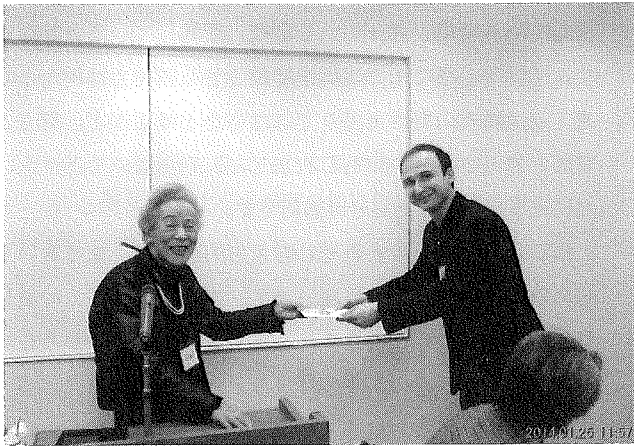
確か10周年をお祝いするご挨拶の中でサロンの活動の対象がなぜポーランドかということ、人と人とのつながりを例えとしてお話しました。茶道の「一期一会」に当たるとも書きました。この人と人の関係が人生では最も大切な要素だと思っているからです。その基本は家族関係です。それから住んでいる地域、通っている学校、所属している会社などです。ではその中でその関係を継続させる原動力は何かと考えますと、折々の驚きと誇りではないかと考えます。驚きとは覚醒と言っても良いかもしれません。知らないことや人、また出来事に出遭ったときの感動です。

同じ日本人でも人それぞれ考え方も違えば、振る舞いも趣味も時には使う言葉さえ違います。ましてや外国人の場合は驚きの振幅がぐんと大きくなります。先ず見かけからして違いますし、その人の人生の背景など全く解らないほど違います。しかし、私たちは皆共通項を持っています。それは髪の毛や肌の色が違っていても同じ人間であるという点です。その一点に私たちは安堵感を覚えます。そして彼らの持つ相違点がしばしば驚きとして私たちの目を覚まさせるです。知らないことを知るといふことの満足感は日々経験することです。そしてそれはとりもなおさず相手にとっても同じことなのです。知らない人を知る、そしてその人から知らないことを教わる、その人の知らなかった環境に共存する、その都度私たちは驚きと感動を味わっているように思うのです。相手にも同じ感動を与えていたとすると、これが前記の誇りになるのではありませんか。得るだけでなく与えることの幸福と言って良いかも知れません。

ヨーロッパには昔から「与えられることは幸せだ」という考えがあります。与えられることと与えることの相関関係の中に私たちは驚きと誇りを感じつつ生きていることの意味と察します。このような人の営みの一つ一つが塊となって継続してきたのがサロンではないだろうかと推察するのです。もちろん人間のことでですから、常に愉快なことばかりではありません。しかしそのマイナス面でもお互いの理解と歩み寄りで解決したとき、その驚きも倍増します。

ある哲学では「人は悪魔でもなければ、天使でもない」と言います。それは人間の幅を意味すると私は解釈しています。その幅の中にすべての人間が存在している、いわば厚みのようなものです。その幅を知れば知るほど真の人間像に迫ったことになると思うのです。昔の人は「甘いも酸いも噛み分けた」という表現を人徳の評価としました。このような人間としての深みや幅を追求するところにこのサロンが今日まで続いてきた原動力があるように思われてなりません。皆様のますますのご健康とサロンのご発展を心から祈念しております。

* 日ポ・サロン活動のひとこま



2014年1月25日 総会にて



留学生のみなさん

「ポーランドとのこと」

藤村 恭司

(埼玉県鴻巣市在住)

◆ポーランドへの旅

それはもう40年も前のことになります。東欧諸国がまだ民主化されていなかった時でした。

ショパンの曲に好感を持っていたことから、彼がどんな所で生まれ育まれてきたのか、ずっと関心を抱いていました。折りしも、それを察してくれたかのように東欧三国の首都とウィーンを巡るツアーがあることを知りましたので、勇んで参加することに決めました。

ポーランド航空のチャーター機だったことから最初に降り立ったのはワルシャワでした。別世界に着いてしまったという感じで胸が一杯になりました。ショパンの生家も訪ねることができ、そこで生演奏が聴けたことも夢のような出来事でした。成人するまでの多感な時を過ごされた所を知ることができたことが何よりでした。ショパンの曲を聴く度に、その時の情景が目に見えます。

◆留学生

旅から帰った後、よりポーランドに対する関心が深まり、言葉を覚えたいとなりましたので、ある方より東大に留学中の確か、レナータさんという方を紹介してもらいました。毎週1回、文京区にある伝通院(徳川家康の母の於大さんの墓のある寺)の側のアパートまで通いました。熱心に教えてもらいましたが、残念ながら結局ものになりませんでした。仕事の関係や覚えの悪さから約1年ばかりで諦めてしまいました。その際、何と無く終わってしまいましたので心残りになっていました。

◆日ポ・サロンとの出会い

ある日の新聞でのポーランドの留学生を支援している日ポ・サロンという会の記事が目にとまりました。ポーランド語を教えてくれた留学生や文通をしていた方がずっと気になっていましたので、何かその償いのようなことができればと思い、事務局の河合様にお電話しましたところ、早速、入会申込書を送って下さりました。遠路などの為、行事には参加できませんが、河合様からのお手紙や行事の案内、そして会報などにより、記憶の底に沈んでいたポーランド熱が甦ってまいりました。会報などにより、留学生から学ぶことも多くありました。中でも最後の浮世絵師といわれた月岡芳年のことは全く知りませんでした。早速、没後120年記念の「別冊太陽」を購入して読みました。

最近の宮沢賢治のことでは以前興味を持っていたことがありましたことから、またこれを機にビデオを観たり、CDを聴いたり、本を読んだりしています。

平々凡々な生活をしていますので、大いに刺激を受け、脳も大分活性化しているように感じています。

今後ともよろしくお願いいたします。

「ポーランドワルシャワ大学への留学」

木原春香

(神戸大学国際文化学部5年)

はじめまして、木原春香と申します。

私は、神戸大学国際文化学部の交換留学生制度を利用し、2013年10月から2014年6月まで2学期間ワルシャワ大学に留学しました。まず、約1年も海外で留学するという経験は私にとって初めてのことで、大きなことだったと思います。日本を離れることで、日本や自分が日本人であることを意識し、日本について知れたこと、気づかされたことも多くありました。これは日本を出たから得られたことだと思います。

次に、ポーランドワルシャワ大学の留学でよかったことについて考えてみます。留学期間中の大半を過ごしたワルシャワは、とても便利のよいところでした。近代的なビルが次々に建てられており、首都の忙しい雰囲気を感じられる一方で大きな公園もあり、くつろぐことのできる空間がありました。滞在中、メトロ東西線の工事もなされており、寮の近くには新しいショッピングモールができました。トラムやバスには新しい車両も多く、市内の交通は思っていた以上に便利で快適でした。ワジェンキ公園やポレモコトフスキエの公園では自然を感じることができ、冬はほんとに白黒の風景が、春になると一瞬にして色づき明るくなるのを感じられます。約1年の滞在でポーランドの四季や行事を街中で体感することができました。ポーランド人の暮らしや考えについて、実際に住んだからこそ感じられたことは多かったと思います。

更にポーランドは色々な国と陸続きでつながっており、人の移動が容易なことから、ヨーロッパ、中央アジア、中東を中心に様々な地域からの留学生と出会うことができました。また、私自身もヨーロッパを10ヶ国ほど旅し、様々なものを見ることができました。ポーランド国内もまわることができ、都市によって異なる雰囲気を味わえました。交通費や宿泊費が日本よりも安いところも多く、旅行をしやすかったです。実際に土地に行き、その違いを見て感じられることは、とても楽しく、よい経験になりました。また、人との出会いもあり、多様な考え、今まで自分にはなかった考えを知ることができました。ポーランドワルシャワを中心に、新しいものを見て、聞いて、感じられたことがこの留学での成果だと思います。

「感じる力」

入舟 梓

(神戸大学国際文化学部5年)

同じ風景を見ていても、それに感動する人と何も感じない人がいます。同じ体験をしても、多くを学ぶ人と、そうでない人がいます。その違いは、日々の生活の中で感受性を磨くことができているかどうかだと私は考えます。

ポーランドでの10ヶ月間は、私にとって自分のアンテナを増やし感受性を磨くことのできた期間でした。その事が、私が留学して一番良かったと思うことです。

どうして感受性を磨くことができたかという、理由は3つあります。

一つは、今までとは大きく異なる聖環境に身を置いたからです。ポーランドで初めて一人でスーパーに行き、水と果物を買ったとき、小さな達成感をえました。お米と炊飯器を買って初めて炊いたご飯は、とても甘く感じました。限られた世界で生きてきた私にとって、ポーランドでの生活は些細な事に喜び、落ち込み、感動する日々でした。

もう一つの理由は、10ヶ月の間に何か学ばなければ、と焦っていたからです。わざわざポーランドに来たからには、何か得なければ帰れない、という気持ちがありました。普段はとても怠け者の私ですが、留学中はできるだけ外に出て、多くの新しいものに触れようと思いました。私はクラクフのユダヤ文化について卒業論文を書きましたが、そのきっかけとなったのは、クラクフ旅行中にたまたま訪れたユダヤコミュニケーションセンターでも小さな出会いでした。小さな出会いを大切にすると、芋づる式のように新たな出会いや気づきに恵まれるということを実感しました。そしてそれは卒論執筆においてもとても重要な手助けとなりました。

もう一つの理由は、様々な国籍の人の多様な価値観に触れたからです。日本人相手ではなんとなく感覚で伝わることで、バックグラウンドの異なる人との会話では、相手がどういう過程でそう感じたのか、想像してみないとわからないことが多くありました。そういう意味で、異文化に出会うことは感受性を働かせることだと私は考えます。

ポーランドに留学して初めて、自分の感じ方次第で世界の見え方が変わるということを知りました。4月からは社会人として新生活がスタートしますが、そのことを忘れずに小さなことから多くを吸収することのできる社会人になりたいと思います。

退任ご挨拶

河合 康子

今年の9月で日ボ・サロンを創設して丸15年になり、私は80歳になります。15年前にはこの事業がこうのように長く続くとは思ってもよらなかったもので、10人位の留学生を受け入れたら充分だと思っていました。それが今年ですでに13人目になりました。15年前は、NPO法人というものが出来たばかりで、とりあえず法人の資格を取っておこうと登録をしました。けれど今までは毎年、大阪府へ年間報告を出さなければならず、恩恵を受けるより煩わしさばかりでしたが、今になって、法人にしておいて良かったと思います。個人は年老いても、法人は年老いるどころか、所属する人たちの努力によってどんどん発展することができるからです。

最近、日ボ・サロンはシニアの活動の理想的な形だと思うように成りました。シニアに必要なことは出かける機会が多いこと、会員同志が話し合う場があり、同じ目的の為に活動する場があること。それに優秀な留学生達が毎年違ったテーマを持って日本に来るので、彼らの話を聞くだけで沢山刺激を受け脳が活性化されます。そして何よりも支援することで喜んで貰える幸せは計り知れません。

65歳で設立した日ボ・サロンのおかげで、この15年間に私の世界はどんなに広がった事でしょう。中でも日本の文化を再発見したことが一番大きく、日本の伝統文化の素晴らしさにあらためて感動することが出来ました。また、会員の人の豊かな個性からも一杯刺激を受け、豊かな人生を送ることができたことを感謝しています。

NPO法人にしておいたおかげで私が年老いて動けなくなっても、次の世代が、そして又その次の世代の人々が順々にバトンタッチして会の運営を続けて下さり、数多くの留学生を育てて行って下さることを心から願っています。

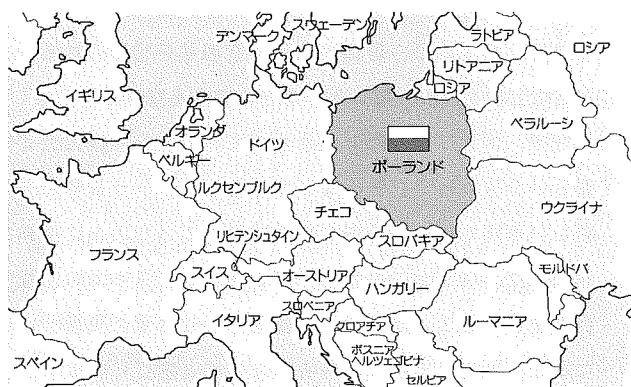
私はこれからも今までの経験を生かして役に立てる事があれば役立てながら、若い人達の活動を見守っていきたくと思っています。

今日まで支えて下さった皆さんに心より感謝申し上げます。有り難うございました。



関西在住日ボ・サロン後援留学生(2014年度)

ヤヌシュ・ミトコ	京都大学文学部大学院文学研究科
マルチン・タタルチュク	京都大学文学部大学院現代文学科
佐々木・ボグナ・ヤンコフスカ	京都大学ポーランド講座講師
アガタ・ヴェルボウスカ	神戸大学経済学部大学院
グラジク・マウゴジャタ	神戸大学国際文化学部
片岡カカリナ・マリア	元同志社大学日本語学科
ハリウオ・ヤクブ・マレタ	神戸大学国際文化学部
カマシェフスカ・ハニヤ	大阪教育大学
ハルチェンコ・アナスタシヤ	京都大学文学部
ユリア・ブライスナル	立命館大学国際学部



特定非営利活動法人 日ボ・サロン

<http://nipposalon.org/>

編集後記

日ボ・サロン創立15年記念会報の発行、又この記念する年度に15人もの新入会員をお迎え出来心より感謝いたします。ポーランドからの留学生がそれぞれ多方面にわたって真摯に学ばれている姿に接して私たちは元気づけられます。神戸大学からも10人以上の学生さんがワルシャワ大学で留学生生活を経験され、2国の若者が国際的に成長されるのは何よりの喜びです。記念号には会員、留学生、活動に参加されたお客様から心入れの原稿を寄せて頂き、読み応えのある会報になりました。会員皆様に2部送付致します。ご友人ご家族に日ボ・サロンを知って頂くことにお使い下されば嬉しく思います。

事務局担当 岸 本 啓 子